

「主をお迎えしましょう」

マタイ 14 章 22 - 33 節

ヨハネによる福音書 3 章 16 節

森島 牧人 牧師

メリークリスマス！昨夕の燭火礼拝の続いて、今日も皆さんとご一緒に、クリスマスの喜びをお祝い致しますよう。

聖書は先週と同じマタイ 14 : 22 - 23 で、今日はその後半、弟子たちの乗る嵐の中の舟に近づいて来られた主イエスと弟子たち、つまり教会、私たちの物語です。

暗く悲しいニュースの多い昨今、どう生きて行けばいいのかと考えこむ私たちはみんな、嵐の湖上を漂う教会・舟に乗り合わせていると言えます。そんな私たちを見つけ、神の子としての力を持って荒れる湖上を歩き、私たちに近づいて来て「安心なさい。わたしだ。恐れることはない。」と仰ってくださる主イエス……。これこそがクリスマスのメッセージです。何としてでもあの人たちのところへ行かなければと嵐の湖上を歩まれる主は、同時に、十字架の上で肉を裂き血を流される主イエス・キリストです。

しかし嵐の湖上を歩いて近づいて来られる主を見て、弟子たちは恐怖の叫び声を上げたのです。でもその弟子たちに主は、「安心なさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われました。この時主イエスの言われた「わたしだ」は、「わたしはいる・わたしはある」との言葉で、聖書の中では神が御自身を言い表される時の言葉として使われています。よく知られているのは旧約出エジプト記の「神はモーセに、『わたしはある。わたしはあるという者だ』と言われ、また、『イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと」(3 : 14) というところです。主イエスは嵐の湖上で「わたしはいる。神として、あなた方の師として、あなた方を救う者としてここにいる。だから安心なさい。恐れることはない。」と弟子たちに言われたのです。

聖書は「すると、ペトロが答えた。『主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。』イエスが『来なさい』と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。」(マタイ 14 : 28・29) と続きます。このペトロの言葉は「今から行きます」というような自分の力を恃みとしたものではなく、「来い」と主が言われたなら、水の上でも歩ける、新しい人生に踏み出せるという信頼をこめたものでした。ここにいる私たちが信仰生活を続けられるのも「わたしのところへ来なさい」というこの主の言葉を礼拝の度に聞くからです。主はすべての人に自分のもとへ来るように、新しい人生に踏み出すようにと呼びかけておられるのです。かつてこの主の言葉を信じてバプテスマを受け、踏み出した、そこに私たちの新しい人生がありました。

主からこの「来なさい」という言葉をいただき、信じて踏み出したペトロに不思議なことが起こりました。彼は恐れや不安を足の下にして乗り越え、水の上を歩くことが出来たのです。このペトロの素晴らしい体験、これは私たち各々にも身に憶えのあることです。

しかしペトロの湖上の歩みは長続きしませんでした。聖書には「しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。」(同 14 : 30・31) とあります。これも私たちがよく経験することで、主の「来なさい」に従って踏み出したはずが、眼前の険しい道に気がつき、恐れおののいて沈んでしまうのです。

ペトロを助けた後、「信仰の薄い者よ」と嘆かれた主イエス。実際のところ私たちは今まで主のこの言葉を幾度お聞きして来たことでしょうか。そして助けて頂いたことだったでしょうか。ここで、大切なことは主はペトロに「信仰の薄い者よ」とは言われましたが、「信仰のない者よ」とは言われなかったということです。それは沈みかけたペトロが「主よ、助けてください」と言ったからでした。私たちもペトロと同じように何度も何度も沈みかけそうになり、「主よ、助けてください」と叫びます。その度に主は「信仰は小さいけれど、ゼロではないね」とおっしゃりながら手を差し伸べて助けてくださるのです。

このような神さまが、嵐の湖を突き抜け、十字架の上で血を流し、御自分の命を私たちに与えるためにこの世に来てくださったのです。そして、嵐の中を一步も進むことの出来なくなっている私たちに近づいて来られて、「わたしはいる、わたしはここにいる。わたしのところへ来なさい」とおっしゃって手を差し伸べてくださっているのです。

(説教要約 羽入田悦子)